

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 中野 幸男

本論文は、アブラム・テルツの筆名も用いて執筆活動を行った亡命ロシア作家アンドレイ・シニャフスキー（1925-1997）の生涯と作品の全体を視野に入れた研究である。第1章「地下文学と証明」、第2章「収容所とトラウマ」、第3章「亡命と回想」の全3章からなり、それぞれの章がシニャフスキーの生涯における地下作家時代（ソ連国内でいわゆる「地下」の非公認作家として活動した時期）、収容所時代（裁判で有罪判決を受け、刑務所で服役した時期）、亡命時代（1973年にソ連から亡命後、フランスで作家活動をした時期）に対応している。このような三分は外的な伝記的事実によるものでやや機械的にも見えるが、本論文では作家の創作の内的プロセスと緊密に相互作用を及ぼしあうものとして分析されており、政治的な時代に非政治的な態度を貫き通したシニャフスキーという複雑な作家の全体像をダイナミックに描き出すために有効なものと評価できる。

第1章では地下作家時代に書かれた作品の中でも、特に評論「社会主義リアリズムとは何か」と短篇小说「プヘンツ」について重点的に論じられる。前者は社会主義リアリズムが唯一公認の芸術創作方法とされていたソ連社会にあって、その欺瞞性を真っ向から批判し、それに代わるものとして「夢想的芸術」を提唱した論考であり、「プヘンツ」はその主張を言わば実践に移した作品と言える。この作品に関しては、カフカや安部公房の作品との親近性や、シニャフスキーの安部公房に関する否定的な評価についての指摘も注目される。

第2章では収容所内で書かれたプーシキンをめぐる長篇評論『プーシキンとの散歩』やエッセイ集『合唱からの声』が取り上げられ、収容所体験が作家にとって持った意味が分析される。それは、共同体から閉め出された存在によって実践される新たな「収容所批評」の試みだった。

第3章では、亡命後の作品のうち、長篇小説『おやすみなさい』と中篇小説『ちびのツォレス』が主に取り上げられ、これらの作品において自伝的素材が虚構の物語の中に織り込まれていたプロセスが分析されるとともに、回想、日記、書簡、またそれらの資料を収める容れ物としてのアーカイヴが亡命文学にとって持つ意義が論じられる。

このような分析を通じて、地下文学、収容所、亡命、記憶と回想といった主題系列がシニャフスキーの生涯および作品と交錯し、広い視野からの作家像の見直しが可能になった。アメリカのフーヴァー研究所に所蔵されているシニャフスキーに関する未公刊資料の活用も、本論文の学術的価値を高めている。文章表現に生硬な点が散見され、様々な話題や概念を援用しながらもそれがシニャフスキーの作品を理解するためにどれほど本質的なのか、よく突き詰められていない場合があるが、精力的な調査と独創的な分析に基づいた優れた研究成果であることに疑問の余地はなく、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に相応しいものと判断する。